



社会福祉協議会、自治体関係者向け勉強会

子ども宅食とは？

2020年7月 こども宅食応援団

こども宅食とは

様々な形で困りごとを抱えている子育て中のご家庭に
周囲に知らない形で、
定期的に食品や生活用品を届ける事業

家庭と
つながる

関係性を
築く

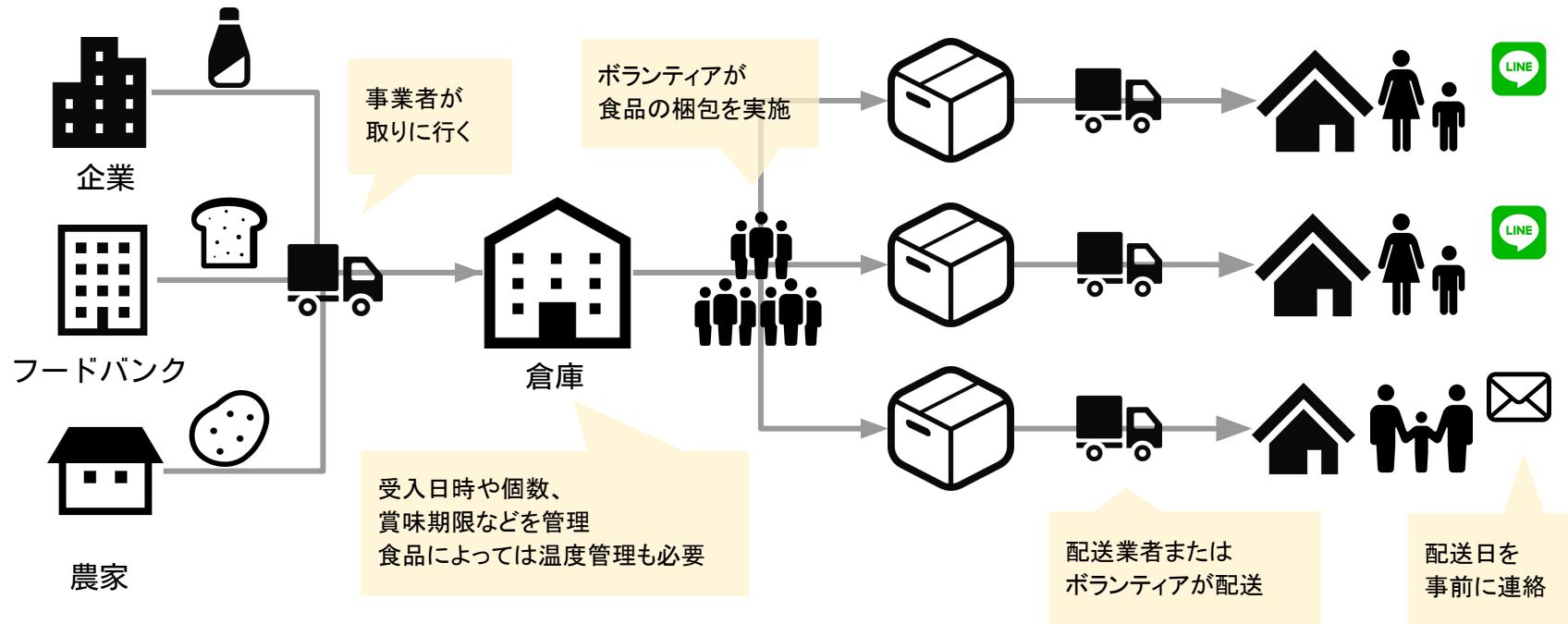
変化を
見つける

こども宅食事業の実施プロセス



農家や企業、フードバンクから寄付で頂いた食品を倉庫に保管。

配送前に梱包して個別に配送するのが基本の流れ。

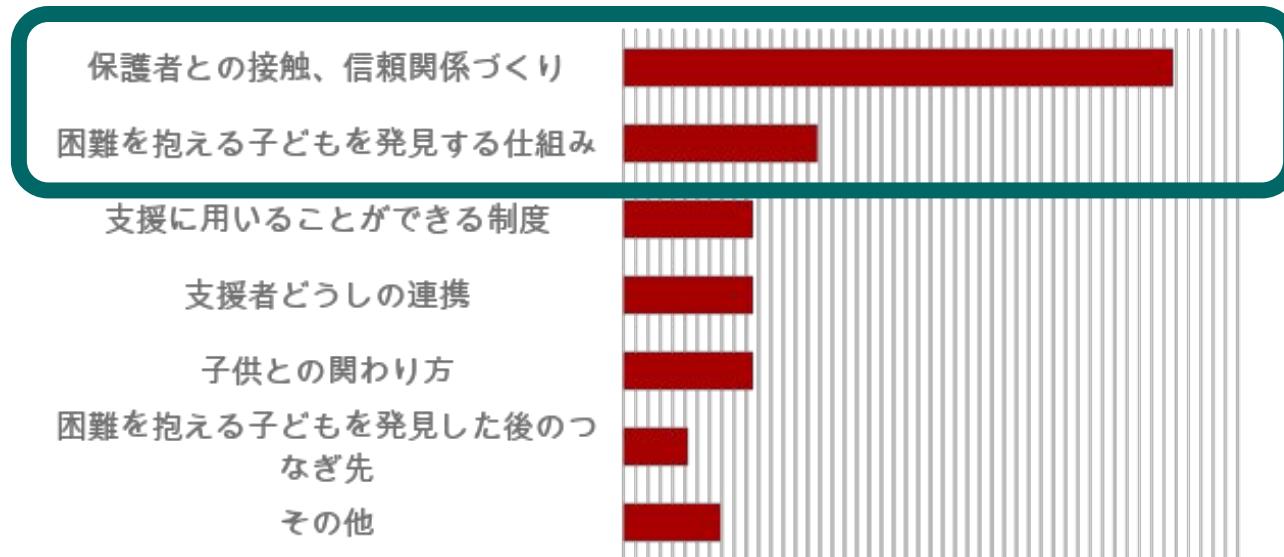




なぜこども宅食が必要なのか？

支援者が、困難を抱える子どもとその家庭の支援にあたって困難を感じることで多いのは、「保護者との信頼関係づくり」。
その次に多いのは「困難を抱える子どもを発見する仕組み」が不足していること。

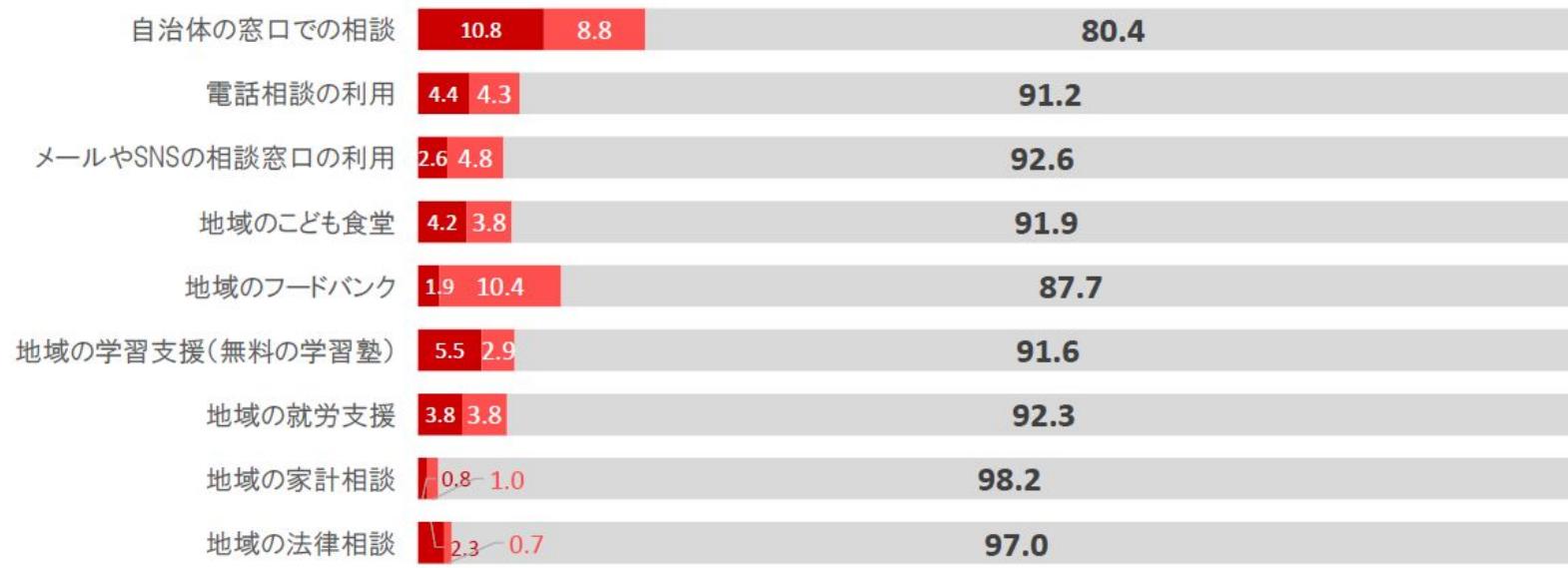
困難を抱える子どもとその家庭の支援にあたって困難を感じること(N=19/複数回答可)



困難を抱えるご家庭では支援サービスの利用率は低く、8割の人が利用していない。既存の方法では、家庭に支援が届きにくい現状がある。

以下のサービスや窓口の利用状況について、教えて下さい。

(%)



■コロナ禍以前は利用していたが、今は利用していない

■現在も利用している

■もともと利用していなかった

支援が届きにくいのは、社会に様々な制約や障壁が存在するから。



心理的な障壁

家計も赤字だし、子育てもうまくできていないし、人に知られたら「親として失格」と思われるのでは

私より困っている人がいるんじゃないかな、私なんかが利用していいのかなという思いがあって。

昔、支援を受けたときに嫌な思いをしたことがあって。もう関わりたくない。



物理的な制約

仕事を掛け持ちしながら子育て。平日に窓口に行く余裕がない。

フードバンクやこども食堂に行きたくても、ガソリン代や駐車場代を出すお金の余裕がないんです。



周囲のまなざし

プライドなのかもしれないけど、貧しい、生活が苦しいというのを周りに知られたくなくて。特に保育園の人には。

田舎町の○○市で支援を受けることは…何人も顔見知りがありますので…子ども食堂やフードバンクもありますが利用できません。



情報の伝達

どうやって支援団体に助けを求めたらいいかも、わかりません。

とにかく自治体の支援の情報もこちらから調べないと届かないし、支援自体が少なすぎる。

こども宅食事業のポイント

支援が届きにくい家庭に
リーチできない

リーチしても
支援が利用されない

こども宅食で実現できること

関係性構築の実施

継続的関わりの強化

つながりにくい家庭の生活課題の重篤化を予防する

子供の貧困対策に関する大綱：基本方針

1

貧困の連鎖を断ち切り、
全ての子供が夢や希望を持つ社会を目指す。

2

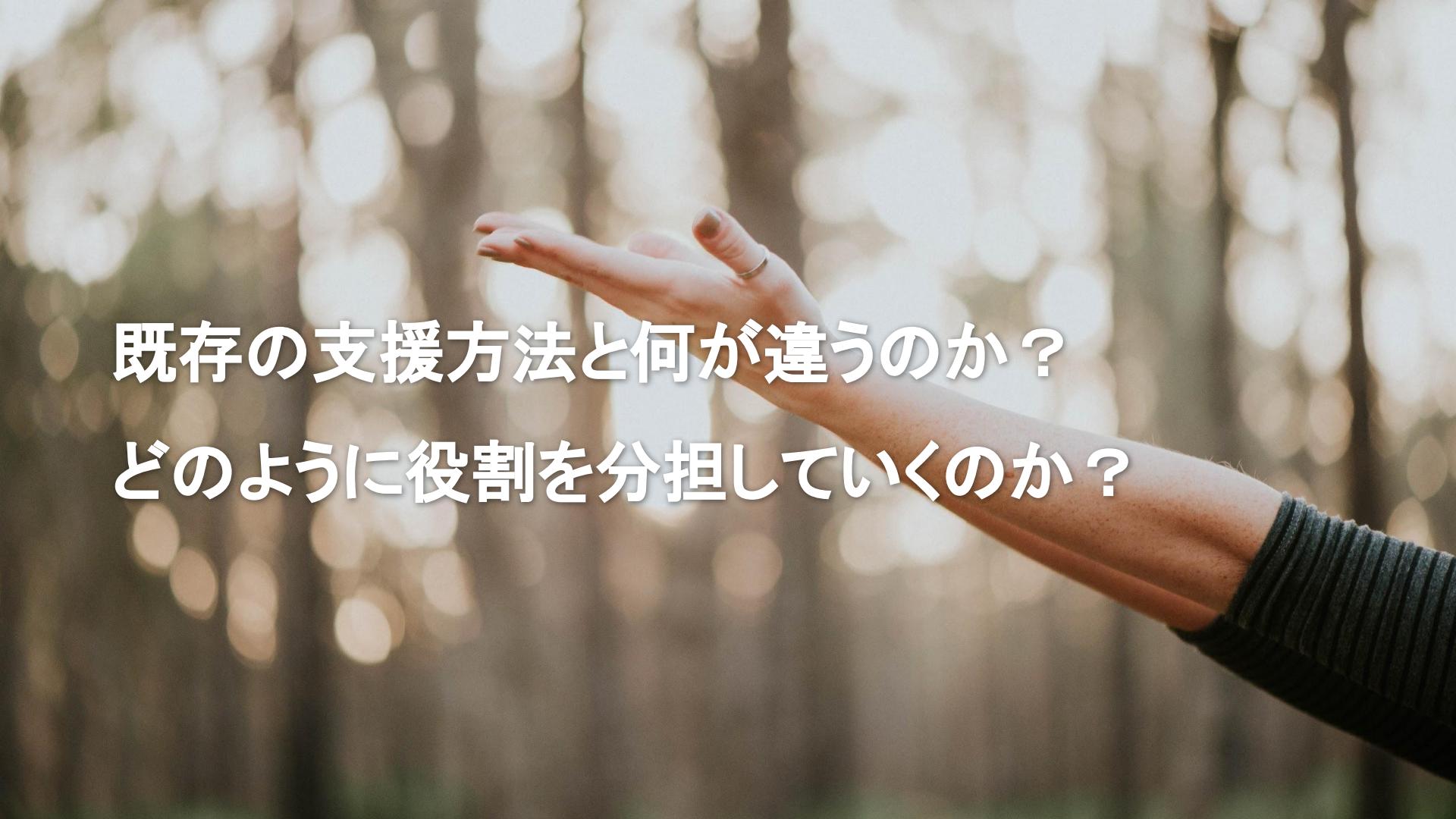
親の妊娠・出産期から子供の社会的自立までの
切れ目のない支援体制を構築する。

3

支援が届いていない、又は届きにくい子供・家庭に
配慮して対策を推進する。 New

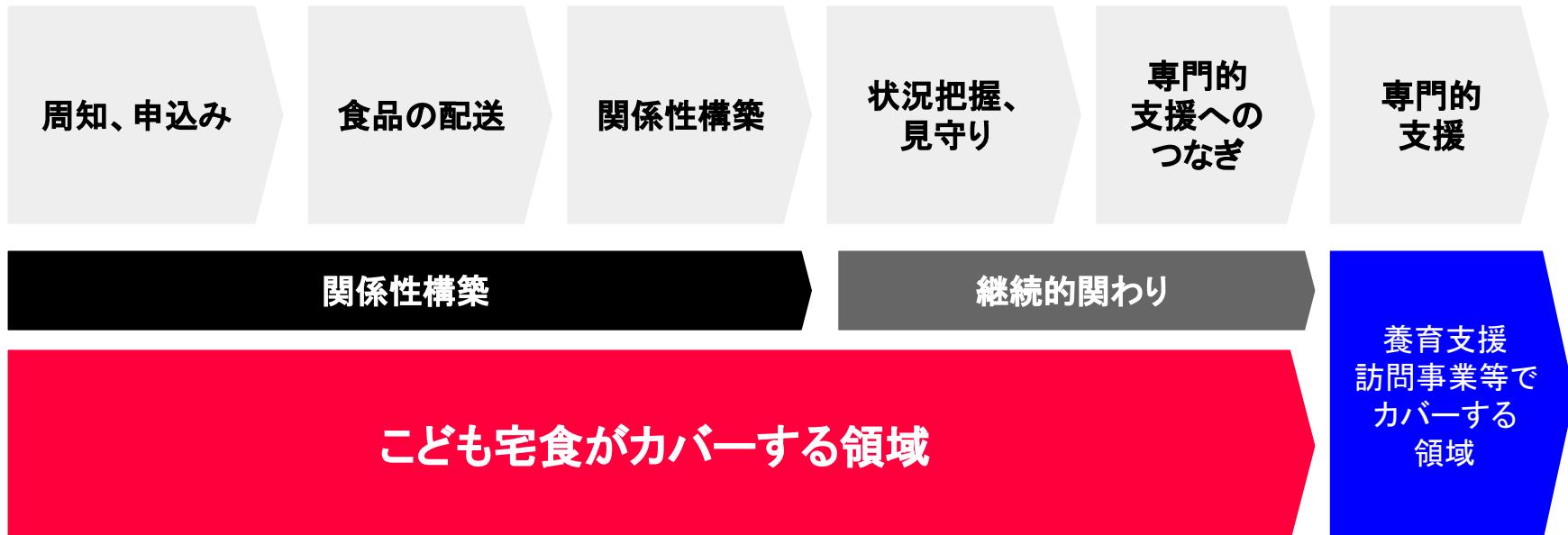
4

地方公共団体による取組の充実を図る。



既存の支援方法と何が違うのか？
どのように役割を分担していくのか？

こども宅食は「専門的支援へのつなぎ」になるツール、支援の入り口として既存の専門的支援によりつなげやすくしていくと考えています。



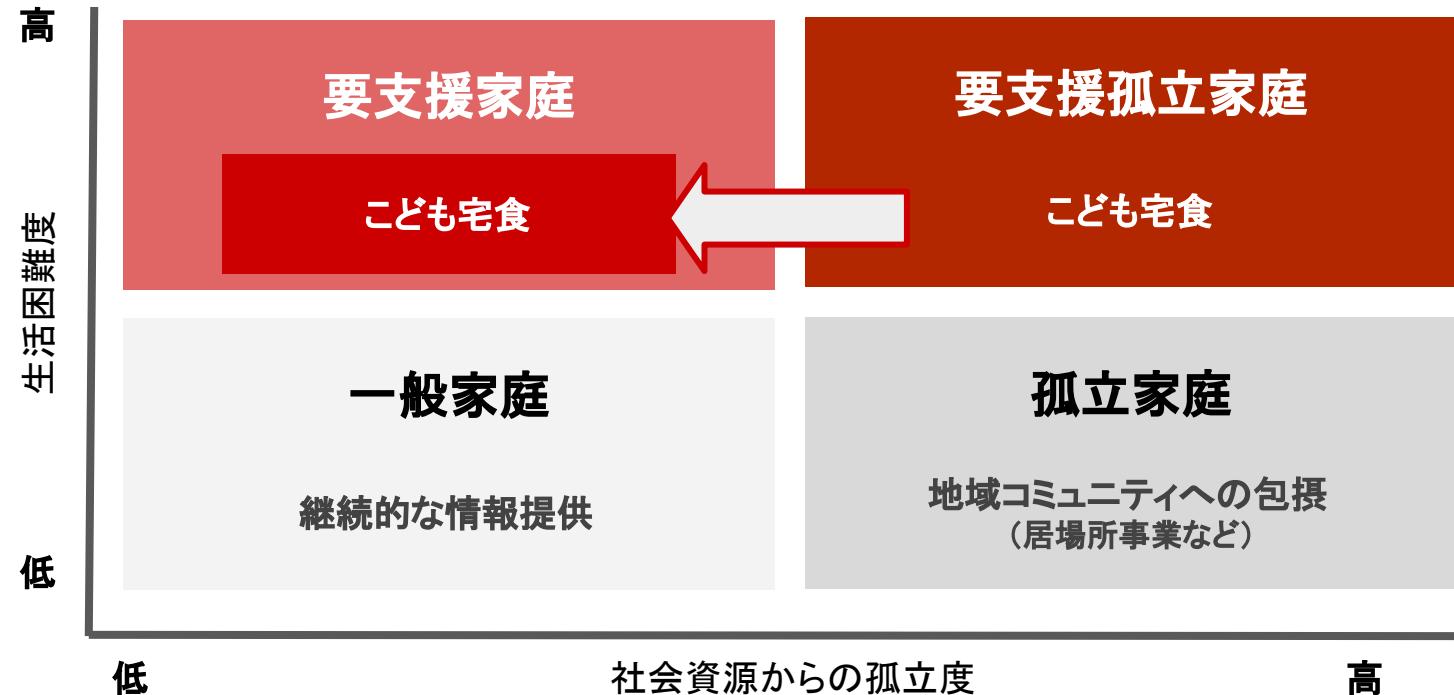
こども宅食は、困難がより見えづらく、アプローチしづらい、
要支援孤立家庭を対象とするのが適していると考えています。



こども宅食は、困難がより見えづらく、アプローチしづらい、
要支援孤立家庭を対象とするのが適していると考えています。

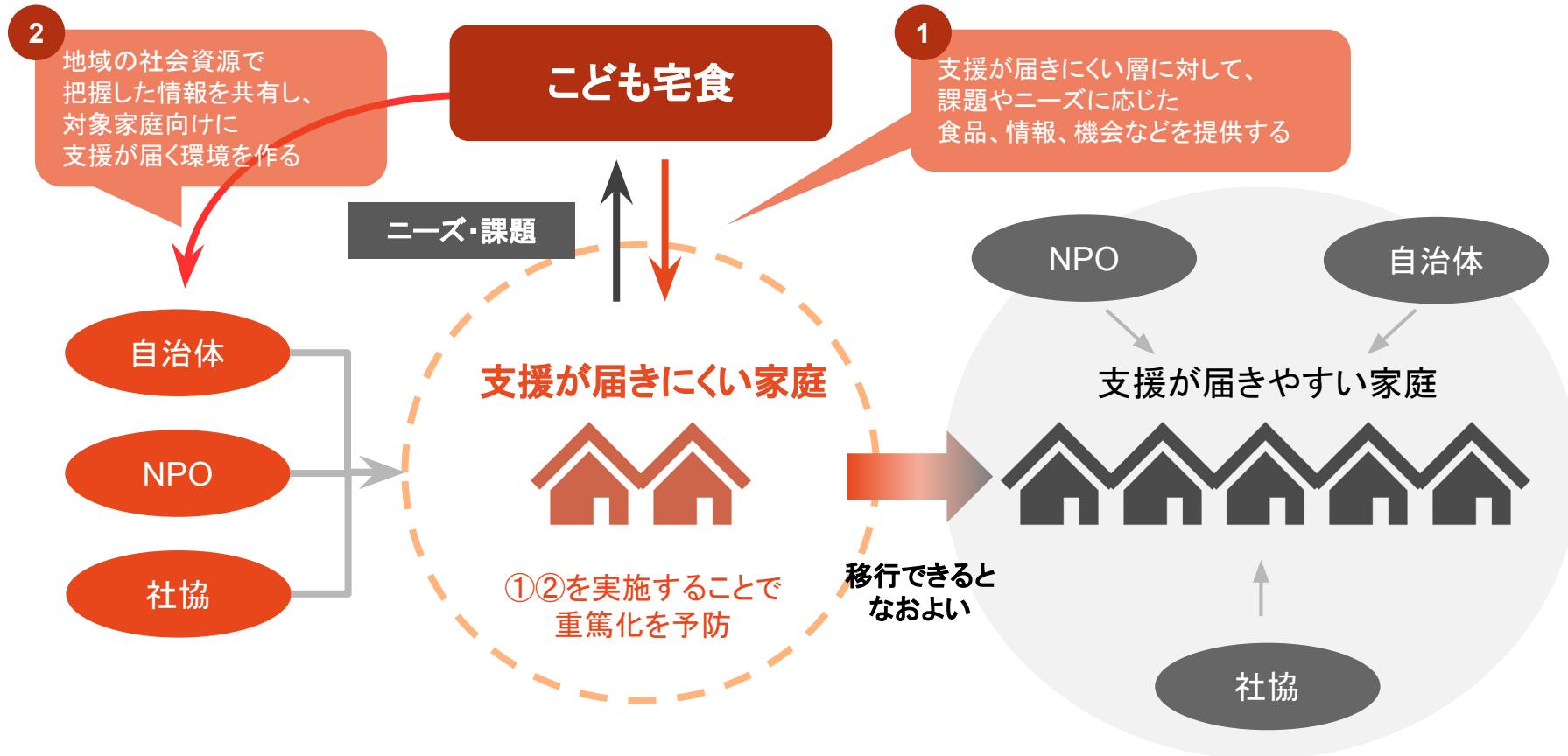


今回、見守り事業の中で「要支援家庭への見守り強化」の手段の一つとして、
こども宅食が採用されました。本来はまだ課題が顕在化していない家庭へのアプローチ方法として活用するのに適した手法である、と思っています。



こども食堂やフードバンクとは、対象とする世帯が異なると考えています。
それぞれが地域の中で共存し、補完しあうことが必要であると考えています。

対象	比較的つながりやすく、支援が届けやすい家庭	つながるのが難しく、支援が届きにくい家庭	
支援	見られる支援 (支援として自覚しやすい)	見られない支援 (支援として自覚しにくい)	
社会資源	<ul style="list-style-type: none">・こども食堂・フードバンク、パントリー・窓口での相談(行政、NPO)	<ul style="list-style-type: none">・電話／メール相談	<ul style="list-style-type: none">・能動的・継続的・こども宅食

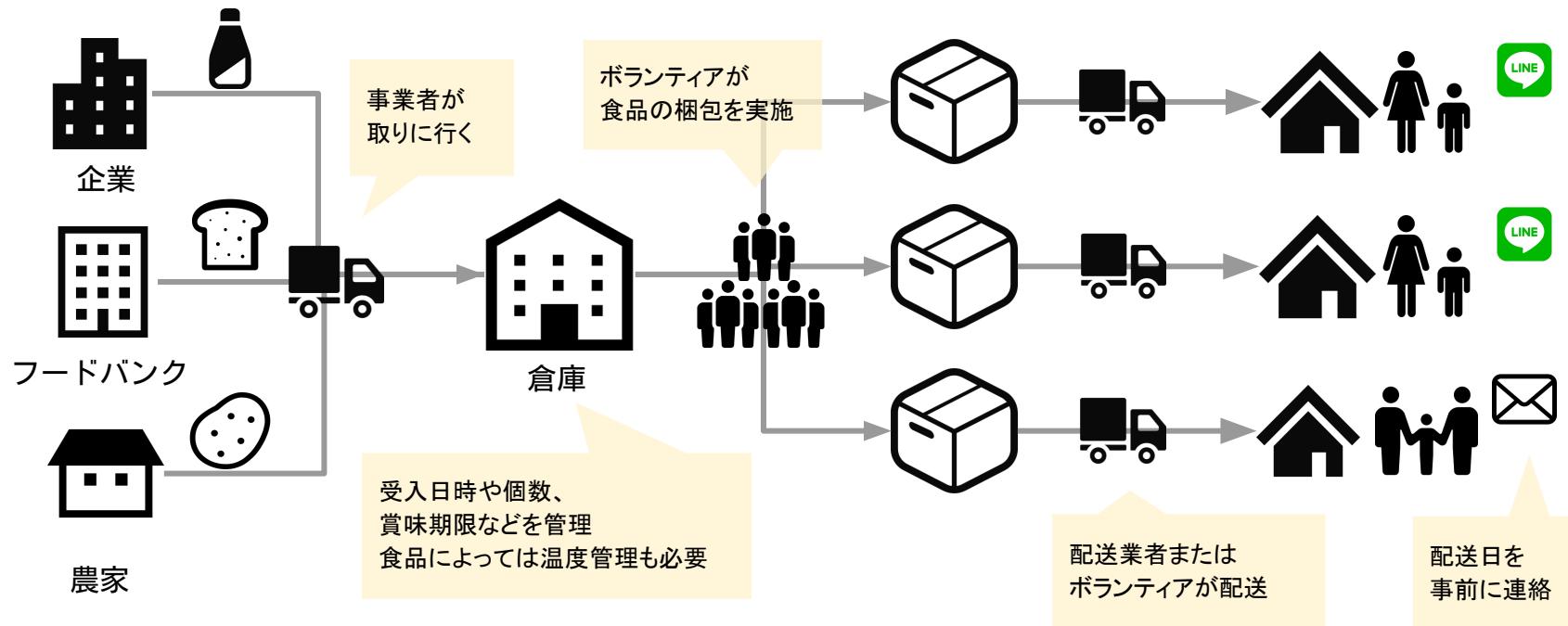




具体的にどんなことをやっているのか？

農家や企業、フードバンクから寄付で頂いた食品を倉庫に保管。

配送前に梱包して個別に配送するのが基本の流れ。



食品確保・保管



配送準備



パッキング



配送



1回あたり配送量

8 kg以上

配送頻度

2ヶ月に1回



地域の特性に合わせた様々なモデルが生まれている



佐賀県佐賀市 こどもおなか一杯便

お金も、人手もすべて地域で集めて、北川副小学校に子どもを通わせる
就学援助受給世帯に食品を届ける、**地域主体の子育て応援プロジェクト**
小学校の校区を対象に、同じ地域にすむ住民が中心となって運営している



宮崎県三股町 みまたん宅食どうぞ便

県外からは見えない「つらい」を抱えた親子とつながるため、
町をあげてみんなで実践するアウトリーチ事業

町で作った農産物や加工食品を、地域のボランティアが中心となって配達している



長崎県長崎市 つなぐBANK総合支援事業

県内の支援団体/専門家が協力し合い、**会員専用の「居場所」で食品提供と同時に総合的な家庭相談を行う、新しいソーシャルワーク事業**

長崎は斜面の上に建っている家が多く、車での配達が難しいことから取りに行く「宅所」事業としている

こども宅食応援団は各地のこども宅食を支援しています

こども宅食、全国に拡大中！



応援団が連携して
こども宅食が
始まった地域数

9 地域

応援団が連携している
こども宅食を
実施している団体数

15 団体

地域の特性にあわせた
多様な事業が各地で生まれています！

こども宅食で出会った家庭とその課題

取り扱い注意

使える制度を知らない家庭

- 小学生の子どもと二人暮らしのシングルマザー(30代)。失業し、失業保険と貯蓄で生活していた。
- 生活費や将来が不安であると「こども宅食」に申し込み。
(=就職の相談をしたかった訳ではなく、単なる食料支援として申し込んだ)
- 長期に派遣職員として就労。「生きるための仕事と感じ、働く事に意欲がわからない」という状況で、正職員との格差などに悩む。

外から見えづらい・行政の情報だけでは把握できない困窮

- 庭付きの新築の家、ソーラーパネル、自家用車など
外からは困窮の問題は無さそうな家庭。
- 20代後半の夫婦と子供4人。
- 共稼ぎのため、勧められるままに多額のローンを契約。毎月の返済が高額であり、外出、食費や子供の衣類等を節約。生活費の不足をカードで埋める生活。
- 夫は「夫婦二人で働いているのだから何とかなる」と妻の不安を聞き入れない。

自分の課題が把握できていない

- 母親に軽度の知的障害がある、ひとり親家庭。
- 障害認定も受けていない
- 子どもが3人おり、食事の提供も含め養育が難しい状況。
- 保育所から「子どもが食べていない様子なので、様子を見に行ってほしい」とこども宅食事務局に紹介があった。
- 本人は養育困難の状況にあるという認識はない
(きちんと自活できているという認識)。

行政への拒否感が強い

- 夫婦、こども2人の世帯。妻は若い(20代前半)
- 夫がパニック障害で仕事をしていない。民生委員が生活困窮している様子をキャッチし、こども宅食につながる。
- その後子供に対する虐待が発生し、児童相談所に子供が保護される。それ以来、**行政に対する拒否感・怒り**が増える。
- その後、第3子が生まれるが保健師等の訪問を拒む。

A photograph of a person's arm reaching out towards a forest. The arm is in the foreground, with the hand open and fingers spread. The background is a dense forest with sunlight filtering through the leaves, creating a bokeh effect of bright circles.

今後、どのように動いていくのか？

今後、コロナ禍においては家庭の様々なリスクが高まっていくことが予想される。
withコロナ下で支援を届けられるように、社会をアップデートしていく必要がある。

コロナ禍の家庭に起こると予想されること

- ❖ 不況によってこども達の食事や生活環境が十分整わなくなる
- ❖ 家にこもることが増えて家庭内のストレス、DVや虐待のリスクが高まる
- ❖ 収入減・支出増に伴い、習い事や学習・体験の機会が減少する
- ❖ 感染リスクやコロナの影響度のばらつきが大きく、家庭の事情に応じた個別対応が必要になる
- ❖ 感染リスクに応じて刻一刻と変わる状況に合わせて、生活を適応させていく必要がある

コロナ禍では直接足を運んで継続的に関わっていく出前型の支援(アウトリーチ)が重要。

- ・こども食堂のような、特定の居場所に人を集めるような窓口型支援は感染リスクが高く、より機能しづらくなる
- ・学校や保育園など、社会との接点がへり、家庭の状況が外から見えづらくなる
- ・家庭の状況の変化を把握しながら、柔軟に支援を提供していく必要がある。

コロナ禍におけるこども宅食の事業フェーズ

フェーズ	1 緊急支援	2 制度導入	3 事業普及
概要			
緊急性／継続性	緊急性		継続性
活動	物資の確保と分配、助成による立ち上げ支援	事業モデルの確立、政策ロビинг 効果の高い事業への伴走支援	事業のパッケージ化、ノウハウ集積、 事業の効率化、効果の最大化
成果	配送世帯数、配送物の量・質	制度・予算の活用実績、 モデル事業での効果・エビデンス	全国地域の力バレッジ、 事業ノウハウ

コロナ禍におけるこども宅食の事業フェーズ



制度導入フェーズにおいて必要となる活動(案)

カテゴリー	施策案
事業立ち上げ支援	<ul style="list-style-type: none">コロナ緊急支援を通じた新規団体とのリレーション構築こども食堂 → こども宅食へのシフト促進実施団体への資金助成、物品提供
制度活用の実績づくり 成果の見える化	<ul style="list-style-type: none">令和2年度補正予算の自治体への導入支援事業成果報告書、制度改善要望書の作成（政策提言につなげる）
事業普及のための環境づくり	<ul style="list-style-type: none">自治体や社会福祉協議会向けの勉強会の開催全国の実施団体の地域コミュニティの構築事業ニーズや家庭の実態を把握するための調査（エビデンスの見える化）
制度導入のためのロビイング活動	<ul style="list-style-type: none">令和3年度通常予算にこども宅食事業を入れるための諸活動（Webでの広報、官僚・議員へのインプット、事業報告書の作成など）